

- (4) 『新聞雑誌に現れた明治時代文化記録集成』（昭和十年九月、大成書院刊）による。
- (5) 同 右
- (6) 同 右
- (7) 『日本教科書大系近代編第十五卷、地理（一）』（昭和五十二年六月、講談社刊）による。
- (8) 『日本教科書大系近代編第一卷、修身（一）』（昭和五十三年十二月、講談社刊）による。
- (9) 『お茶の水女子大学百年史』（昭和五十九年五月、同刊行委員会刊）による。
- (10) 『日本教科書大系近代編第二十五卷、唱歌』（昭和五十三年十二月、講談社刊）による。
- (11) 「赤い鳥 鈴木三重吉追悼号」（昭和十一年十月発行）複製版二十九頁。
- (12) 「赤い鳥」複製版解説、六十一頁（昭和五十六年八月、日本近代文学館刊）による。

治、木村毅、直木三十五等と同期である。

詩人としての出発は、明治四十五年七月号の「早稲田文学」に詩「石階」を発表したのをはじめとする。大正元年十二月日夏耿之介等と創刊した「聖杯」を大正二年九月、「仮面」と改めて再出発。

同人には、石井直三郎、吉江孤雁等がいた。翌三年二月、三木露風、川路柳虹、山田耕作、灰野庄平、柳沢健等と季刊誌「未来」を創刊し、その文学的雰囲気の中で詩作を続けた。大正四年、二十三才で早稲田大学英文科を卒業。これまでの間、「かねなか」（株式仲買店）に勤め、給料と株の収入で家計をつなぎながら、翌五年六月、小川晴子と結婚。十二月、堀口大学、日夏耿之介、富田碎花、柳沢健等と「詩人」を創刊した。生活面では、英書専門出版社「建文館」に出資し重役となったり、「天三」（てんぶら屋）を始めた<sup>注12</sup>り、株の売買などにより、住居も建文館二階へ移り住む。大正七年五月、長女嫩子が生まれる。

鈴木三重吉と初めて出会うのはこのころである。

八十はその出会いについて「三重吉さんの来訪」と題し、次のように書いて<sup>注12</sup>いる。

「雑誌『赤い鳥』が創刊された頃、ぼくは老母と弟妹を抱え、無一文で人生の波濤を泛っていた。神田の東京堂裏で小さな書籍出版社をやっていた。その店頭<sup>注12</sup>に忽如小男で口髭をはやした鈴木三重吉が現われたのである。三重吉の抒情的な小説は雑誌『新小説』その他で愛読し、その名は夙に知っていた。」  
八十も、「赤い鳥」によって、よみがえったのである。

「赤い鳥」では当初からの方針で、童話、綴方、童謡などの投稿を奨励していたので、地方からも寄せられ、童謡部門は白秋が選んでいた。

こうして日本各地に、新しい童謡、赤い鳥式の童謡が広まり、これまでの教訓性の強い唱歌、子供にとっておもしろみのない唱歌中心だったところから、生気があり、豊かな抒情性をもった童謡へと、大きく方向をかえていくのである。

そして、ここでいえることは、この新童謡の生命ともいえる抒情性を育み、担っていった「赤い鳥」の作家達、白秋、八十が、前述の経歴のように、文部省出身でも、教育畑の人物でもなく、在野の人だったことが、この新童謡に自由性と豊かさを与えたと思われることである。

それは、童謡が、官製の窮屈なものから、在野の大らかな抒情性を持ったものへとかわったということなのである。

#### 注

- (1) 『学制百年史・資料編』（昭和五十四年一月、ぎょうせい刊）十四頁。
- (2) 伊沢は、まだ信濃にいた十六才の頃、藩で洋式訓練が開始されると鼓手になったが、その技術が抜群のため、木曾へ鼓手教官として招かれたという。音楽の才を伺わせる話である。（『教育学辞典』昭和十三年五月、岩波書店刊）
- (3) 『日本教科書大系近代編第二十五巻、唱歌』（昭和五十三年十二月講談社刊）による。

「明星」が廃刊され、翌四十二年「スバル」が創刊されると、白秋も同人となり、若い詩人達の文芸運動は明治四十二、四十三年と新しい展開を見せ、盛況となった。

このような時流の中に、白秋は、四十二年三月には処女詩集『邪宗門』（易風社）を刊行、さらに、四十四年五月には『思ひ出』を東雲堂から出版、上田敏に激賞されるなど、詩人としての評価が定まった。十月の「文章世界」の明治十大文豪投票では、詩人の部第一位になっている。白秋二十六才のことである。ついで、雑誌「朱欒」を出したり、「時事新報」の歌壇選者になるなど詩人白秋は高い評価を得、その地位はゆるぎないものとなった。

ところが、明治四十五年七月、かねて恋愛中の新聞記者夫人松下俊子とのことで、姦通罪に問われ、告訴された。そして、市ヶ谷の未決監に二週間拘留されるに至り、社会的非難を受け、それまで築いてきた名誉を一気に失なった。また、郷里では、家が破産、父が上京し白秋を頼るという事態に追い込まれている。大正二年四月、失意の内に俊子と再会。夫と別れた俊子と結婚し、家族で三浦三崎町に転居する。東京芸術座のために「城ヶ島の雨」の作歌などするが、この年「朱欒」を十九冊で廃止。

父と弟の事業失敗や、妻俊子の病いなどもあり生活は困窮し、加えて俊子と両親の間もうまくいかず、翌三年七月離婚した。大正四年には弟鉄雄と阿蘭陀書房を創立し、『わすれなぐさ』（抒情小曲集）『雲母集』（歌集）を同社より出版。また「ARS」を創刊する。大正五年五月、江口章子と結婚。『雪と花火』（『東京景物詩

及其他』を増補改題）『白秋小品』（散文集）「煙草の花」などを出すが、相かわらず生活は窮迫していた。翌年、弟鉄雄がアルスを創立し、妹家子は山本鼎と結婚する。

「赤い鳥」が創刊されたのは、白秋がこのような逼迫した暮しを余儀なくさせられていた大正七年のことであり、その後、生まれかわった気持の中で、純真な子供の心を求めて作ったのが、「赤い鳥」掲載のいくつかの童謡なのである。

八十の方は、明治二十五年一月十五日、東京市牛込区払方町八番地の生まれである。父西条重兵衛、母は徳子。兄弟は金三郎（養子）、キク（夭折）、サエ、英治、兼子、キヨ（夭折）、八十、隆治、富貴である。重兵衛は、明治十三年に質屋を廃業し、石鹼製造、外国石鹼販売業を営んでいた。明治三十七年私立桜井尋常高等小学校を卒業した後、早稲田中学校へ入学。このころから文学に親しむと同時に、英語に興味を持つようになった。

明治三十九年五月、十四才の時、父重兵衛が脳溢血により急逝。当時、兄英治は放蕩のため廃嫡されており八十が家督を継いだ。莫大な資産は、兄英治と番頭により処分されていたので、苦境におちいることになった。明治四十二年（十七才）早稲田中学校を卒業し、早稲田大学英文科予科に入学するが、二ヶ月後退学。その後、神田正則英語学校へ行ったり、暁星中学でフランス語を学んだり、姉兼子の嫁ぎ先（奈良）に一年ほど滞在して三高受験の準備をした。しかし、明治四十四年に早稲田大学英文科へ再び入学すると同時に、東京帝国大学国文科選科生となった。早稲田では坪田讓

りなく、郷愁も手伝うのか、「人形」「池の鯉」「案山子」「紅葉」「春が来た」など、非教訓歌が圧倒的に多い。

そして、この非教訓歌の抒情性が、子供の歌にとってかけがえのないものとなり、重視されていくのである。

明治の末期から大正にかけて、こうした子供の心情を大切にし、また言文一致によった童謡が現われてきた。

この気運の中で、鈴木三重吉主宰による「赤い鳥」が、大正七年七月創刊されるのである。

三重吉は創刊に際して、「童話と童謡を創作する最初の文学的運動」と題したプリントを作り、会員を募集した。<sup>(まじ)</sup>そのプリントには、

「世間の小さな人たちのために、芸術としつ真価ある純麗な童話と童謡を創作する最初の運動を起したいと思ひまして、月刊雑誌『赤い鳥』を主宰発行することに致しました。」

と、自信と計画を明らかにし、また、

「私どもは、自分たちが子供のときに、どんなものを読んで来たかを回想しただけでも、われ／＼の子供のためには立派な読物を作つてやりたくありません。又現在の子供が歌つてゐる唱歌なども、芸術家の目から見ると、実に低級な愚なものばかりです。」

と、如何に子供の文化、芸術の現状が貧しいかを訴えている。

さらに、「私は私の雑誌が、第一に大人のお方の推賞を得ることとを熱望いたします。」と述べ、大人の鑑賞に耐え得る「児童のための雑誌」を創る気概を表明している。

三重吉の期待に應えて、抒情性豊かな童謡を創造し、子供の歌を發展させ、支えたのは北原白秋と西条八十であった。

この評価については別稿に譲るとして、二人の新童謡の担い手である北原白秋と西条八十の、「赤い鳥」との関わりまでを略記しておく。

白秋は、明治十八年一月二十五日、福岡県山門郡沖端村大字石場五十五番地に、父北原長太郎、母しげの次男として生まれた。長男豊太郎が夭折したため、嫡男として育てられている。本名は隆吉。

家は代々続いた豪商で、父の代から酒造業を営んでいた。使用人は百数十人いたという。高等小学校二年終了後、二年飛び越し、福岡県立中学校伝習館へ入学した。しかし、三年進級時に、幾何ができず落第。

文学に没頭しはじめたのは、この頃からのようである。「文庫」「明星」などに親しみ、投稿したりする。十六才(明治三十四年)の時、大火により酒倉などを焼失し、以後家運は傾く。白秋という号は、この冬に決めている。十八・十九才のころ、「文庫」河井醉茗に詩「恋の絵ぶみ」、「林下の黙想」などが認められている。

十九才で中学を退学し、上京。早稲田大学英文科予科に入学。若山牧水、土岐善麿等と同級になる。明治三十九年(二十一才)、新詩社に加入し『明星』の同人となったが、その年末には退会している。明治四十一年「新思潮」「中央公論」「新声」に寄稿。この年十二月に、美術と文学の交流を計り、新しい近代文芸を起こそうと、木下左太郎、吉井勇、石井柏亭、山本鼎等と「パンの会」を結成した。

に配慮し逆に子供の心情とは合にくいものとなっている。

ここで、一度『尋常小学唱歌』を見直し、教訓歌と非教訓歌がどのような割合で出てくるのか、第一学年用から第三学年用までについて、具体的にみてみることにする。尚、「折衷歌」としたのは、いくらか教訓的な雰囲気のある歌であり、「その他」としたのは昔ばなしなどから題材をとったものである。また、特に文語体の歌詞はその旨を記した。

表記すると次のようになる。

### 第一学年

『尋常小学唱歌』一年における非教訓歌の比率、65%

「鳩」、「おきやがりこぼし」、「人形」、「かたつむり」、「夕立」、「朝顔」、「池の鯉」、「鳥」、「菊の花」、「月」、「木の葉」、「兎」、「紙鳶の歌」、「犬」

『尋常小学唱歌』一年における教訓歌の比率、15%

「日の丸の旗」、「ひよこ」、「親の恩」

『尋常小学唱歌』一年における折衷歌の比率、0%

なし

『尋常小学唱歌』一年におけるその他の比率、20%

「牛若丸」、「桃太郎」、「花咲爺」

### 第二学年

『尋常小学唱歌』二年における非教訓歌の比率、50%

「桜」、「雲雀」、「小馬」、「田植」、「雨」、「蟬」、「案山子」、

「紅葉」、「雪」、「梅に鶯」

『尋常小学唱歌』二年における教訓歌の比率、35%

「二宮金次郎」、「よく学びよく遊べ」、「蛙と蜘蛛」、「仁田四郎」（文語）、「天皇陛下」（文語）、「母の心」、「那須與一」

『尋常小学唱歌』二年における折衷歌の比率、10%

「富士山」、「時計の歌」

『尋常小学唱歌』二年におけるその他の比率、5%

「浦島太郎」

### 第三学年

『尋常小学唱歌』三年における非教訓歌の比率、30%

「春が来た」、「青葉」、「汽車」、「虹」、「虫のこゑ」、「雁」

『尋常小学唱歌』三年における教訓歌の比率、60%

「かがやく光」、「友だち」（文語）、「鶴越」、「日本の国」、「取入れ」、「豊臣秀吉」（文語）、「皇后陛下」（文語）、「冬の夜」、「川中島」（文語）、「おもひやり」、「港」（文語）、「かぞへ歌」

『尋常小学唱歌』三年における折衷歌の比率、10%

「茶摘」、「村祭」

『尋常小学唱歌』三年におけるその他の比率、0%

なし

右を見ると、文語調は非教訓歌には見当らず、教訓歌に六曲ほどあることがわかる。また、学年が進むにつれて、教訓歌が次第にふえていく。

しかしながら、今日でも歌われている曲は、教訓歌の方にはあま

## 新童謡への胎動

われたが、その際、園児等はその前で、遊戯歌「風車」を歌ったという。開園当初、保育理論は翻譯書に依拠したが、唱歌や遊戯は二名の保母、豊田英雄と近藤浜が翻譯案作詞し、これに宮内省の伶人が譜をつけたものが明治十二年頃まで使われていたという。<sup>注9)</sup>「風車」もこの内の一つである。

文部省が初めて幼児向きの音楽教科書を作成したのは、明治二十年十二月で、『小学唱歌集』につづいて出された『幼稚園唱歌集』である。その「緒言」<sup>注10)</sup>に、

- 一、本編ハ、児童ノ、始メテ幼稚園ニ入り、他人ト交遊スルコトヲ習フリ当リテ、嬉戯唱和ノ際、自ラ幼徳ヲ涵養シ、幼智ヲ開発センガ為ニ、用フベキ歌曲ヲ纂輯シタルモノナリ。
- 一、唱歌ハ、自然幼稚ノ性情ヲ養ヒ、其発声ノ節度ニ慣レシムルヲ要スルモノナレバ、殊ニ幼稚園ニ欠ク可ラズ、諸種ノ園戯ノ如キモ、亦音楽ノ力ヲ假ルニ非レバ、十分ノ効ヲ奏スルコト能ハザルモノナリ。

と述べ、徳育、智育を開発するための唱歌集を編んだこと、また唱歌は、子供の性情を養い、発声を習熟させるために、特に幼稚園では必要不可欠であるとしている。歌曲は二十九曲収められている。最後の第二十九曲は「数へ歌」である。「一つとや、人々一日も忘るなよ。く。はぐみそだてし、おやおん、おやおん。」が最初で、「十」まで非常に教訓的な色彩が濃い「数え歌」となっている。このことはこの歌集全般的にいえることで、先の「小学唱歌集」に習ったものである。

以上見てきたように、児童教育のために作られた初期の音楽教科書『小学唱歌集』と『幼稚園唱歌集』の詞は、修身的な内容のものと、自然の美しい風物をうたった内容のものを主としたのであるが、子供にとっては難解な言葉や、なじみのない雅語であり、生活に結びつきにくい文語体であった。

しかし、この傾向は次第に改良され、『教科適用幼年唱歌』（明治三十四年六月発行、納所辨次郎、田所虎蔵共編）では、歌詞を「多年小学教育の経験有せる識者の手に成りて、児童の心情に訴へ、程度を察し、平易にして理解し易く、而も詩的興味を失はざるもの」とした。そして、「さるかに」「おつきさま」「おおさむこさむ」など完全口語体の歌を収録し、児童が親しみを持つよう工夫されている。この「幼年唱歌」以後、言文一致歌はますます作歌されるようになった。

それでもまだ歌詞の内容は、『教科適用幼年唱歌』も尋常科は、「専ら修身、読書科に關係する事項、及び四季の風物に因みて之を取」っている。

明治四十四年五月発行、文部省編纂の『尋常小学唱歌』も作詞編集委員は、芳賀矢一、上田万年、尾上八郎、高野辰之、武島又次郎、八波則吉、佐々木信綱、吉丸一昌等一流の学者をそろえたが、審議による修正を加えたり、他教科と関連する題材を選ぶなど、教育的

に人を造らず人の下に人を造らずと言へり」と記し、封建社会の否定から始め、賢人と愚人の差は学ぶと学ばざるの違いによるとし、「専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり」と説き、青少年に大きな影響を与えた。また、同年三月に出版した『童蒙をしへ草』<sup>註8)</sup>は、その序に、「英人『チャンプル』氏所著ノ『モラルカラッスブック』ト題」した書を訳し年少者の「読本ニ供」したもので、「願クハ後進ノ少年諸学入門ノ初ニ」読んで、「慎独修身以テ分限ヲ誤ラズ次第二物ニ接シ人ニ交ルノ道ヲ明カニ」してから諸学を学べば、「裨益ヲ為シテ弊害ヲ生ズルコト」がなくなるであろう、と述べているように諸学研究の入門書である。全五巻、二十九章にわかれており、各章の最初にその章の中心テーマの道德について解説をし、ついで実例として、寓話や逸話をいくつか並べている。第一章「動物を扱ふ心得の事」では、動物への愛情を説き、さらに各章で、勤労、健康、儉約、寛容、など個人の道德や、人間関係における道德、最後第二十九章「我本国を重んずる事」では、国に対する道德について書いている。具体的な個人の問題から抽象的な社会の道德へと、読みつがれるよう配慮されている。

このように福沢が書き著した啓蒙書は、大変平易な言葉でわかりやすく記されており、早くから小学校の教科書に用いられている。明治五年の「学制」による下等小学教科の内容をみると、『童蒙をしへ草』は八級と七級「修身口授」の、『学問のすゝめ』は六級「読本読方」の、『世界國尽』は三級「地学読方」、二級「地学輪講」のそれぞれ教材となっており、福沢の啓蒙書は広く一般に知られ、人

々を啓発していった。

そして、啓蒙書に込められた数々の教訓は人々に次第に浸みとおっていった。『童蒙をしへ草』などは、その題が明示するようにまさに道德を教えるものであり、教訓書であった。

唱歌において、教訓性の強い歌が、これら啓蒙的風潮の中でつくり出されていったのは、学制の政治性とも関わった当然のことであった訳であり、政治が志向するところを具体化した一つの世界であったともいえるのである。考え方の一般性ということの一例をあげてみると、『童蒙をしへ草』の第二章「親類に交る心得の事」にある。

「我身の稚き時には父母我に食を興へ父母我に着物を着せ千辛万苦心を用ゐて我を教育せり若し父母の恩愛なかりせば我身は早く命を保つこと能はざりし筈なり故に人の子たる者は父母の大恩を忘るべからず」

は、『小学唱歌集初編』の「第二十二、ねむれよ子」の歌詞「父のおほせやまもるらん。」「母のなさげや、したふらん。」「ちゝは、のかはらぬみ顔。をがみませ。」と同旨である。

では、就学以前の子供達はこの時代、どんな歌を歌わされていたのか。

明治八年十一月二十九日に東京女子師範学校が開校されたが、その翌、明治九年十一月十六日には附属幼稚園が開園し、保育が開始された。

そして、明治十年十一月に、皇太后、皇后を迎えて開園式が行な

見事に巻も花聲に 〳

七ツトセ 長崎箱館掛けわたす電しん機、

遠くの嘶も居ながらに 〳

八ツトセ 矢を射る如くに岡蒸気速かに、

横浜かよひも一寸の間 〳

九ツトセ 刻限違はぬ郵便のはる〳と、

海山へだて、便りよや 〳

十ツトセ 当時は英佛丁マルカ独逸でも、

丸く附合ふ御世豊たか 〳

また、「幼童教訓新いろはかるた」(明治八年一月二九日、郵便報知新聞)には、<sup>(註6)</sup>

「い、一新のいさほし早き伝信機、開化も届く英の龍動」に始まり、「す、過しこと未来の事の判断に、無くても成らぬ参議(算木)也けり」「京、京の夢大阪過ぎて江戸へ来て覚めぬ夢路の面白きかな」に至るまで「幼童教訓新いろはかるた」とはいいながら、いわゆる「文明開化」の羅列である。子供の世界をうたうよりも、大人にとっておもしろいものをならべ、示し与えている。

さて、これらをながめてみると、庶民のものであるはずの「数え唄」や「いろはかるた」などにも、維新後、どっと移入された西欧文化に驚きながらも、新しい知識を受け入れ、広めようとする風潮をみてとることができる。つまり、自然発生的に啓蒙的な内容を盛り込んでいるといえるのである。

ここにみられる啓蒙的な雰囲気は、福沢諭吉の『世界国尽』など

に近いものである。

『世界国尽』は明治二年に出版された全六冊の世界地理、及び地理学入門書である。一の巻「発端、亜細亜州」、二の巻「阿非利加州」、三の巻「欧羅巴州」、四の巻「北亜米利加州」、五の巻「南亜米利加州・大洋州」、六の巻「地理学の總論・天文の地学・自然の地学・人間の地学」からなっている。

凡例の第一に、<sup>(註7)</sup>

「此書は世間にある翻訳書の風に異なれども其実は皆英吉利亜米利加にて開版したる地理書歴史類を取集めその内より肝要の處だけ通俗に訳したるものにて私の作意は毫も交へず」と記されており、子供や知識を持たない人々に、世界地理を教えようとするやさしい言葉で著したことがわかる。「発端」の、

「世界は広し萬国はおほしといへど大凡五に分けし名目は『亜細亜』『亜非利加』『欧羅巴』北と南の『亜米利加』に堺かきりて五大州大洋州は別にまた南の嶋の名称なり土地の風俗人情も處変ればしなかなるその様々を知らざるは人のひとたる甲斐もなし学ひて得べきことなれば文字に遊そふ童子へ庭の訓の事始まつ筆とりて大略をしるす所は」

につづき、以下「亜細亜州」からの本文となるが、すべて七五調で書かれている。音読すれば非常に調子よく、暗記しやすくなっている。子供達は、節をつけて歌ったという。

福沢の啓蒙書の内、最も良く知られている『学問のすゝめ』は、明治五年二月にまず「初編」が出版された。冒頭に、「天は人の上



テ、宇内ニ恥ル事無カル可シ」

というものである。

さらに「教学大旨」は、明治十四年六月制定された「小学教員心得」により具体的に徹底されることになる。第一条は次のように指示している。

「人ヲ導キテ善良ナラシムルハ多識ナラシムルニ比スレハ更ニ緊要ナリトス故ニ教員タル者ハ殊ニ道德ノ教育ニ力ヲ用ヒ生徒ヲシテ皇室ニ忠ニシテ国家ヲ愛シ父母ニ孝ニシテ長上ヲ敬シ朋友ニ信ニシテ卑幼ヲ慈シ及自己ヲ重ニスル等凡テ人倫ノ大道ニ通曉セシメ且常ニ己カ身ヲ以テ之カ模範トナリ生徒ヲシテ徳性ニ薰染シ善行ニ感化セシメンコトヲ務ムヘシ」

このような思潮が基礎にあつて『小学唱歌集』は編まれたのであるから、そこに修身的な歌詞が姿を変えて、次々繰り出されるのは当然のことであつた。

こうして国家の方針に沿つた教育歌が学校を通じて広められていくことになるのだが、それでは、これ以前、つまり『小学唱歌集』による歌を歌うようになるまでは、子供達はどんな歌を歌っていたのだろうか。

明治初期（明治六年九月九日）の東京日々新聞に「童謡二三」と題したような記事が載っている。

「頃日一童人の言を聞くに、其事固より骨稽洒落なりと雖、聊目下の景況を知るに足れり、因つて左に、

三筋で盛んなもの、日本橋、柳橋

植て利のあるもの、活字版、蚕場の桑

開明の基る、銀行、洋行

最中の流行もの、どん／＼びや、どん／＼ばしより、

しないで人を集めるもの、榊原謙吉、堅気の芸者

衆人の待つて居たもの、大使の帰朝、早魃の降雨。

兎角沸騰するもの、血税の誤解、禾麥の価

これには、当時の新規で話題になっているものがうたいこまれていて興味深い。しかし、子供の歌というよりも、むしろ大人の「はやり唄」風の観が強い。また、子供の遊戯歌であるはずの「手まり唄」にもそのことは反映し、「東京繁榮の鞠唄」（明治七年十二月八日、郵便報知新聞<sup>註5</sup>）という唄が流行したという。

一ツトセ 光りかゞやく瓦斯燈の其明り、

東京一面照らします

二ツトセ 普請は西洋れん化石畳み上げ、

二階造や三がいや

三ツトセ 三すぢに渡せる日本橋賑ふて、

蝙蝠傘もゆきかよひ

四ツトセ 夜る昼絶えぬは人力車通り町、

道も平の御世なれや

五ツトセ いつも替らず五丁町賑やかに、

おいらん芸者も楽勤め

六ツトセ 昔に替りし筋違ひの眼鏡はし、

日本の伝統的な雅な言葉が散りばめられて、風雅なけしきが写し出されている。これらの詞を用いたことは、この後明治十七年二月に出された「音楽取調成績申報要略」の内容とも合致する。これは音楽と教育との関係について報告した文書であるが、その内に、音楽は心を慰める、しかし、影響力が強いから選曲に注意し、歌詞は理義を扱ったものに、花鳥風月を歌ったものを交え、徳育に資するのがよいという意味のことが述べられており、この基本的な考え方はその後も踏襲されていくことになる。

いま一つの系列である教訓性の強い歌には、「大和撫子」、「五常の歌」、「五倫の歌」などをあげることができる。

#### 「大和撫子」

一、やまとなでしこ。さまざまに。

おのがむきく。さきぬとも。

おほしたてし。ちかはの。

庭のをしへに。たがふなよ。

二、野辺の千草の。いろく。

おのがさまざま。さきぬとも。

生したてし。あめつちの。

つゆのめぐみを。わするなよ。

「大和撫子」と題は優雅であるが、「忠孝」の精神をうたったものである。また、「五常の歌」では、儒教の教え「仁、義、礼、智、信」をうたい、さらに第三十三曲「五倫の歌」では、

#### 「五倫の歌」

父子親あり。君臣義あり。／夫婦別あり。長幼序あり。／  
朋友信あり。

と孟子の説いた「使<sub>メ</sub>契<sub>ヲ</sub>、為<sub>ニ</sub>司徒<sub>一</sub>、教<sub>フルニ</sub>以<sub>テ</sub>人倫<sub>ヲ</sub>。父子有<sub>リ</sub>親、君臣有<sub>リ</sub>義、夫婦有<sub>リ</sub>別、長幼有<sub>リ</sub>叙、朋友有<sub>リ</sub>信」をそのまま歌詞としている。

このように、曲は外国の曲を取り入れるなどしているが、歌詞は伝統的な風雅の世界と、明治初期の忠君愛国の精神高揚を意図したものからなっており、これは、当時の国家的教育方針を如実に反映したものである。

この教育方針は明治十二年三月の「教学大旨」に依っている。その一部を引用すると、

「教学ノ要仁義忠孝ヲ明カニシテ、智識才芸ヲ究メ、以テ人道ヲ尽スハ我祖訓国典ノ大旨上下一般ノ教トスル所ナリ」「然ルニ輓近」「文明開化ノ末ニ馳セ、品行ヲ破リ、風俗ヲ傷フ者少ナカラス。然ル所以ノ者ハ、維新ノ始、首トシテ陋習ヲ破リ、知識ヲ世界ニ広ムルノ卓見ヲ以テ、一時西洋ノ所長ヲ取り日新ノ効ヲ奏スト雖トモ、其流弊仁義忠孝ヲ後ニシ、徒ニ洋風是競フニ於テハ将来ノ恐ル、所、終ニ君臣父子ノ大義ヲ知ラサルニ至ランモ測ル可カラス」「自今以往、祖宗ノ訓典ニ基ツキ、専ラ仁義忠孝ヲ明カニシ道德ノ学ハ、孔子ヲ主トシテ人々誠実品行ヲ尚トヒ、然ル上各科ノ学ハ、其才器ニ随テ益々長進シ、道德才芸、本末全備シテ、大中至正ノ教学天下ニ布満セシメハ、我邦独立ノ精神ニ於

教育上有益である」「西洋音楽を取り入れても必ず合い通ずるところがあるはずであり、そのような音楽を教えたらず教育の効果は上がるものと信ずる」などと述べた上申書を提出した。このことなどが文部省に受け入れられ音楽取調掛が置かれることとなり、明治十二年伊沢は御用掛に任命されたのである。

そして、唱歌が学校教育に取り入れられるに及び、明治十四年十一月初めて文部省音楽取調掛編纂の「小学唱歌集初編」が発行された。「緒言」に伊沢は、「教育ノ要ハ徳育智育体育ノ三者ニ在リ而シテ小学ニ在リテハ最モ宜ク徳性ヲ涵養スルヲ以テ要トスヘシ」と記し、さらに「夫レ音楽ノ物タル性情ニ本ツキ人心ヲ正シ風化ヲ助クルノ妙用アリ」と続けている。また、選曲については「本邦ノ学士音楽家等ヲ以テシ且ツ遠ク米国有名ノ音楽教師ヲ聘シ百方討論悉シ本邦固有ノ音律ニ基ツキ彼長ヲ取り我短ヲ補ヒ以テ我学校ニ適用スヘキ者ヲ撰定セシム爾後諸員ノ協力ニ頼リ稍ヤク数曲ヲ得之ヲ東京師範学校及東京女子師範学校生徒并両校附属小学生徒ニ施シテ其適否ヲ試ミ更ニ取捨選沢シ得ル所ニ随テ之ヲ録」したと述べており、草創期の苦勞を伺わせる。

この理念と方針に従い収録された唱歌は全部で三十三曲である。

第一曲「かをれ」以下、「春山」、「あがれ」、「いはへ」、「千代に」、「和歌の浦」、「春は花見」、「鶯」、「野辺に」、「春風」、「桜紅葉」、「花さく春」、「見わたせば」、「松の木蔭」、「春のやよひ」、「わが日の本」、「蝶々」、「うつくしき」、「閨の板戸」、「螢」、「若紫」、「ねむれよ子」、「君が代」、「思ひいづれば」

「薫りにしらるゝ」、「隅田川」、「富士山」、「おぼろ」、「雨露」、「玉の宮居」、「大和撫子」、「五常の歌」と続き、最後は「五倫の歌」である。「緒言」にあるように歌曲は和洋折衷で、スペイン民謡、スコットランド民謡など外国の曲が半数ほどあり、あとは新たに作曲した歌、俗曲、箏曲、雑楽唱歌などによっている。歌詞は、国文学者の稲垣千穎、里見義、加部巖夫等が作った。

歌詞の内容には、大きく二つの傾向が看取できる。

一つは「花鳥風月」をうたったものであり、一つは教訓性の強いものである。

「花鳥風月」の系列の歌には、「かをれ」、「春は花見」、「鶯」、「桜紅葉」、「見わたせば」など前半に多くみられる。ちなみに、「見わたせば」の歌詞は次のようである。

一、見わたせば。あをやなぎ。花桜。

こきまぜて。みやこには。

みちもせに。春の錦をぞ。

さほひめの。おりなして。

ふるあめに。そめにける。

二、みわたせば。やまべには。

をのへにも。ふもとにも。

うすきこき。もみぢ葉の。

あきの錦をぞ。たつたびめ。

おりかけて。つゆ霜に。

さらしける。

## 「小学唱歌」にみる教訓的性格

近藤洋子

明治四年に文部省が置かれ、引き続き五年八月「学制」の発布が行なわれたが、その時定められた下等小学（六才〜九才）における教科は次のようなものであった。<sup>注(1)</sup>

綴字（読並盤上習字）、習字（字形ヲ主トス）、単語（読）、会話（読）、読本（解意）、修身（解意）、書牘（解意並盤上習字）、

文法（解意）、算術（九九數位加減乗除但洋法ヲ用フ）、養生法（講義）、地学大意、理学大意、体術、唱歌（当分之ヲ欠ク）

以上の十四科目であるが、「唱歌」は「当分之ヲ欠ク」とあり、科目としては取りあげたが、実施しないものとされている。また、下等中学（十四才〜十六才）教科においても科目「奏楽」を「当分之ヲ欠ク」とし「唱歌」と同様の扱いである。

「唱歌」が教育に名実共に取り入れられるのは、明治九年に廃止された「学制」にかわり出された「教育令」を経た「改正教育令」（明治十三年十二月発布）を待たなければならなかった。この「改正教育令」により、明治十四年五月四日「小学校教則綱領」が出さ

れ、小学初等科、中等科、高等科それぞれに「唱歌」を取り入れることを指示している。

このように学校教育に「唱歌」が教科として設けられ施行された背景には、明治十二年十月に設置された音楽取調掛の御用掛、伊沢修二の力が大きく働いている。

伊沢修二は、嘉永四年信濃国高遠に生まれ、明治三年貢進生として大学南校に学んだ。明治七年文部省に入り、愛知師範学校長となつたが、翌八年、第一回貸費留学生として師範教育伝習のためアメリカ合衆国へ留学を命ぜられた。アメリカでは、帰国する十一年までの間、ブリッジウォーター師範学校、ハーバード大学で学ぶと共に、音楽についてメーソンに師事し学んだ。<sup>注(2)</sup>そして、明治十一年四月、文部大輔田中不二麿に、当時海外留学生監督として現地にいた目賀田種太郎と連名で、「現在、欧米諸国では学校教育の中で音楽を教科としている」「音楽は精神を爽快にし、肺臓を強くし、音声を美しくし、聴力をよくし、思考を伸ばし、心を楽しませるので